

# 水の哲学

## タレス 「万物の始源は水である」

タレスは紀元前500～600年頃に活動したギリシャの哲学者。生没年不詳。イオニアのミレトスで生まれ、いわゆるイオニア＝ミレトス学派の創始者といわれる。

現代思想の先駆けともなったドイツの哲学者・ニーチェが「タレスは最初のギリシャの哲学者とみなされる」（『ギリシャ人の悲劇時代の哲学』）と指摘したように世界最初の哲学者と位置づけられている。

### 世界最初の哲学者と呼ばれた理由

なぜタレスが史上初の哲学者と呼ばれるようになったのか。

哲学という行為を歴史的に振り返ってみると、世界や人間や自然を成り立たせている本質＝原理を論理的に探究する営みと見做すことができる。哲学以前の時代ではミュトス＝神話の形でこれらの成り立ちが語られるのが一般的だった。

だから哲学はものごとの探究に際してはじめてロゴス＝論理を導入したとっていいだろう。そしてそのパイオニアがタレスだというのだ。

タレスの活動は幾何学、天文学、気象学、地学、土木技術などに加え、政治や軍事にも積極的に関与するなどきわめて広範囲に及んでいる。当時は自然全般に関する学問を自然学と呼び、タレスはその卓越した能力の持ち主だった。こうした豊か

な自然科学的才能が神話的思考ではなく史上初の哲学者としての論理的思考につながったと推察できる。

### 万物のアルケーとしての水

タレスの「万物の始源は水である」という言葉のなかの「始源」はギリシャ語のアルケーの邦訳で「始元」とも訳されている。

それではアルケーとは何かというと、タレス以後の古代ギリシャ哲学の巨人であるアリストテレスは『形而上学』のなかですべてのものがそこから成り立ち、そこから最初に生じ、最後はそこへと帰ってゆくものと規定している。つまりすべてのものの生成・存在・消滅の過程で一貫して流れている究極の原理のようなものだ。



これを水にあてはめると、すべてのものは水から生じ、水によって成り立ち、水へと帰っていくということになる。この場合の水はたんなる物質的存在にとどまらない。

古代ギリシャでは生命や運動をつかさどる神的神なものとしての魂が万物の源であるアルケーと同一視されていた。したがってタレスにいわせると、万物のアルケーとしての水には生命や運動をつかさどる神的神なものとしての魂が宿っている。タレスのみならず古代ギリシャの哲学者たちは自然＝神的神なもの＝アルケーという一種の汎神論的な地平に立っていた。

### 科学的方法論の先駆者

タレスはなぜ水を万物の始源と考えたのか。

この点についてもアリストテレスの『形而上学』が参考になる。アリストテレスはあらゆるものの種子は湿り気を帯びており、すべての栄養となるものは水気を含んでおり、熱そのものさえも湿り気のあるものから生じていることなどを指摘し、これらの綿密な観察の結果によってタレスは水を万物の始源として位置づけたと説明している。

アリストテレスが注目したタレスの方法論は近代科学でもおなじみの帰納法にほかならない。帰納法は個々の事象から一般的原理を導き出す。これに対して演繹法は一般的原理から個々の事象を説明する。すなわち帰納法は特殊から一般、演繹法は一般から特殊というプロセスをたどる。



この2つの方法論は密接に関連しており、タレスを端緒としてソクラテスを経てアリストテレスによって確立された。近代ではイギリス経験論で有名なベーコンなどが帰納法を発展させ、現在でも自然科学や社会科学の基礎的な方法論となっている。

### まじめに考える必要がある命題

ニーチェは『ギリシャ人の悲劇時代の哲学』でタレスの「万物の始源は水である」という命題を「とんでもない思いつき」としながらも、3つの理由から「まじめに考える必要がある」と述べている。

ニーチェによると「第一にこの命題は事物の根源について何事かを述べている。第二にこの命題はそれを比喩や寓話でなしに語っている。そして第三にこの命題の中にはまだ繭の状態でだが『全ては一つである』という思想が含まれている」と。

ニーチェによるこれらの指摘は世界最初の哲学者としてのタレスの特徴をよく言いあらわしている。単純に考えても人間や自然や世界の成り立ちに水が欠かせない役割を果たしているのは周知の事実だ。

無数とっていい事象のなかから水をクローズアップさせたという点だけでもタレスの名前は永く記憶されるべきだろう。 (高倉)